

月の花挽歌 ～3.月光値千金～

3-3

久里浜までドライブした時に、オーディオT Tクーペに初めて同乗した堀内が、妻のベンツ E 3 2 0 の赤との違いを他意はなく言い立てたので、女心からか、馴染みのディーラーに調べてもらったところ、当方はブリリアントレッドで先方はシグナルレッドだと分かって妙に安堵した往時を、真紀は今、眼前の光景とダブらせて連想していた。

「真紀さん」

背後から不意に呼び止められた。

「はい」

真紀は咄嗟に受け答えて振り向いた。

「兄がお世話になりました」

柔らかな物腰で挨拶する、ショート・ヘアの女杜氏の姿があった。

「はあ」と真紀はギコチナイ相槌を打った。

「ガイド振りはいかがでしたか？」と女杜氏は親しみを込めて尋ねた。

「えーと……、ごめんなさい」と真紀は言い淀みつつ、面映ゆさを取りつくろうように襟元を整えた。

「あがってしまいました。何をどうガイドしたのか、覚えていません」

「私も雲の上を歩いているようで……」

「住まいの方へいらしてください」

「……」

「どうぞ、どうぞ」

来館者で賑わう中を、麻里子と並んで歩いて行く内に、真紀は自然と寛いだ感じになっていた。

「似てらっしゃるわ」

「そうでしょうか」

「目がそっくり」

バッグから携帯を取り出した真紀は、堀内のスナップ画像を表示して、「ね！」と、つい調子に乗って、口をすべらせてしまった。

「あなたのことは、風の便りに聞いていただけです」と麻里子は真紀の振る舞いに戸惑いながらも、気持ちを定めてから伝えた。

「えっ？」

「それでも 100 パーセント、ピンとききました」

「私も 100 パーセント」

「ずるいー。私はヒントが 0 です」

麻里子は瞳をこらして訴えた。

「ほら、そんな風も生き写し」

真紀は凝視を仕返し、(笑うと負けよ)をして、ふざけた。

「思っていた通りの方」「麻里子さんも」

笑みと呼吸が二重になった。

赤いボンネットに落ち葉が一枚滑った。そこを右に折れると、数寄屋造りの瀟洒な母屋が見えた。